

棒手振り同心
事件帖

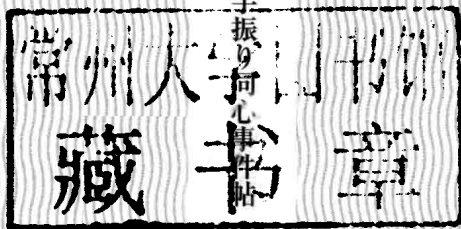
秋の声

千野隆司



秋の声

棒手振り同心事件帖



千野隆司

学研M文庫

あき こえ ほ て ふ どう しん じ けん ち ょ う
秋の声 棒手振り同心事件帖

ち の た か し
千野 隆司

学研M文庫

2012年10月23日 初版発行

●
発行人——脇谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Takashi Chino 2012 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター「棒手振り同心事件帖」係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL 03-3401-2382

<http://www.jrrc.or.jp> E-mail: jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓒ 〈日本複製権センター委託出版物〉

目次

花木槿の家

5

秋の声

108

露霜の雀

190

秋の声

棒手振り同心事件帖

千野 隆司

学研M文庫

目次

花木槿の家

5

秋の声

108

露霜の雀

190

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

花木槿の家

一

裏道に入って少し歩くと、道に沿って白や紅紫の花が、数え切れないほど咲いているのが目に飛び込んできた。五十坪にも満たない敷地のしもた屋の垣根に、こぼれるほどに花開いている。

一つ一つの花はもちろん心惹かれるが、緑の中に浮かんだように見える全体の姿も息を呑むほどに美しかった。芙蓉ふように似ているが、よく見ると違う。

木槿むくげの垣根である。

粗い齒あらのある楔形くさびの葉をつけた枝の先に、葵あおいに似た五弁の花が咲く。夏の終わり頃から咲き始め、七月も半ば近くになって盛りとなった。

純白や紅紫だけでなく、桃色や白い花の底に紅をぼかしたものもある。朝開くと夕にはしぼんでしまう花だが、昼にはまだ間のある刻限には、生き生きとして道行く人の目を奪った。

髻^{びん}だらいいという髪結い道具を収めた小箱をぶら下げて、仕事から帰ってきたお柚^{ゆう}は道端で立ち止まる。何年もの間、怠^{おこた}ることなく垣根の手入れをしてきた花の咲くこの時期がくるのを楽しみにして、一年を過ごしてきたのである。

ああ、また今年も木槿の花を咲かせることができた。そう思うと、ほっとする。

自分にとって掛け替えない人たちが、この花を好んだ。だから大事にしたいと、手をかけてきた。そして花が咲く時季を迎えると、女一人で無事に生きてくることができた、気持ち^{れいがんじま}が和らぐのだ。

ここは江戸の海に近い霊岸島^{れいがんじま}、東湊町^{ひがしみなと}の一画である。同じくらしいの広さのしもた屋が並んでいた。借地だが、建物はお柚の持ちものだった。二十歳のとき^{まわ}にこの家に移り住んで、もう十三年が過ぎていく。

廻り髪結いとして、馴染^{なじ}みの客もそれなりにあった。誰かの世話にならなくても、女一人で食うに困る暮らしはしていない。

少しばかりだが蓄えさえあつて、それは八年前の火事で亡くなった母うたのお陰だと感謝している。

お柚に髪結いの腕を仕込んでくれたのは、『おつかさん』である。うたも木槿の花が咲くのを楽しみにしていた。

空には鰯雲が浮かんでいる。残暑もすっかり影を潜めて、過ごしやすくなった。今日は日本橋の大店商家の家で、女房と娘の髪を結ってきた。馴染みの家で、いつも待ってくれている。

花のついた木槿の枝を持っていってやると、喜んでくれた。そういう顧客は何軒かあつて、それも垣根の手入れをしたくなる理由の一つになっていた。

「おや」

木戸門を入ったところに、人の姿が見えた。一人暮らしの家だから、留守番はいない。

訪ねてきた誰かが、自分の帰りを待っているのだと気がついた。

褐色の弁慶格子の着物を着た、背の高い男である。襟足に近い髷をふつくと出し、髷の刷毛先を散らして上に向けている。『たばね』といった髪形で、渡世人や狭み肌の若者に多い髪形だ。着物の身につけ方も、堅気には見えない。

数歩近づいて、顔が見えた。

「なんだ、竹造たけぞうじゃないか」

男の正体が分かつて、お柚は安堵あんどの声をあげた。今年十九になる甥おいで、付き合ひのある者のうちで、血を分けた親族というのはこの男だけだった。

「ちよいと近くまで、やって来たもんだからね」

竹造はいつものように、眩まぶしげに自分を見て口元に笑みを浮かべた。年に二、三度、思い出したように訪ねてくる。

前に来たときよりも、顔色がよくない。口元に浮かべた笑みも、どこかしらぎこちなく感じた。

「ならば、中に入って待っていればよかった。ここは、あんたが気兼ねをする家じゃあないんだから」

お柚はそう言つて、玄関の戸を開けた。

女が一人暮らすだけの家だから、掃除は行き届いている。台所と部屋が三つあるだけの小さな住まいだった。

とはいつても、一人暮らしの廻り髪結いでしかないお柚が家を持っているのには、それなりの事情がある。

十三年前もお柚は廻り髪結いをしていたが、そのときは芝神明宮しばしんめいぐうに近い裏長屋で母のうたと暮らしていた。しかし浜松町の老舗海産物問屋しにせ、松前屋の若旦那波太郎なみたろうに見初められた。囲われ者になって、一年後には女兒を生んでいる。あてがわれた家が、靈岸島東湊町のこのしもた屋だった。

娘の名はお秋あきで、四歳までお柚は育てた。

波太郎には女房がいたが、子どもができなかった。波太郎の両親、すなわち松前屋の主人夫婦は、跡取りとしてお秋を引き取った。将来婿むこを取って店を継がせようと考えたのである。

「いつかお前を、女房にしてやるからな」

波太郎は幼いお秋を抱いてよくそう言ったものだが、いざとなると意気地のない男だった。女房の実家は京橋の本店で、離別などできなかった。また松前屋の主人夫婦も、お柚のことなどまともに相手にしなかった。血縁のお秋だけが必要としたのである。

お柚おぐちの父親はやくざ者で、喧嘩騒けんかさわぎに巻き込まれて命を落としたが、このとき博奕場ばくちばで作った十一兩の借金を残していた。松前屋はこの借金の肩代わりをし、住んでいた靈岸島のしもた屋を買い受けた。

二度とお秋とは会わない、松前屋とは一切関わりを持たないということを条件にして、与えられたのである。

他には手立てがなかったから、お袖にしてみれば渋々呑んだ約定といえた。堪えきれず、秘かに浜松町まで出かけたことは何度もあったが、お秋に会うことはしなかった。共に暮らすことができない以上、そのほうが娘のためだと考えたからに他ならない。

「木槿が、今年もきれいに咲いたじゃねえか」

竹造は垣根の花に目をやりながら言った。家に入らないで外にいたのは、木槿の花を見ていたからかもしれないと、お袖はふと思った。

「そうだね。あんたもこの花が好きだったね」

「まあな。おれも、垣根の手入れは手伝ったからな」

八年前に神田と日本橋一帯を焼く大火があった。そのとき髪結いに出ていた母親うたは逃げ遅れて命を失った。またお袖の兄である竹造の父親松造まつぞうも火事で亡くなった。松造の女房よねは、二年前に男を作って家から出て行っている。当時十一歳だった竹造は行き場をなくし、叔母おばであるお袖が引き取った。お秋を取り上げられて、半年をようやく過ぎた頃のことだ。

娘だけでなく、母親と兄をいっぺんに亡くしてしまった。兄も父親の血を受け継いでやくざ者になっていたが、それでも亡くしたのは悲しかった。

そんな折りに、唯一自分に残された血縁が竹造だった。竹造にしても、その気持ちは同じはずである。

お柚は可愛がった。もともと懐^{なつ}いてはいた。よく遊びに来て、お秋の面倒を見てくれた。

ただ竹造は、両親からはほったらかされて育った子どもだったから、気持ちは荒^{すさ}んでいて、読み書きも満足にできなかった。喧嘩やかっぱらいなどもよくやった。

謝^{あやま}りに行ったのは、三度や四度ではない。

それでも愛着をもつて、一年半一緒に暮らした。その間に読み書きを教えて、知り合いの髪結い床に弟子入りをさせたのである。手に職があれば、何があつても生きていけると考えたからだ。たった一人の甥として、支えていこうとも考えていた。

けれども竹造は、弟子入りして二年目の十五歳になったとき、悪仲間^{あつちやう}に誘われて博奕場^{あひやうば}に出入りするようになった。それが親方に知られて破門となり、今

では深川馬場通り界隈かいわいの地廻りの子分になった。

喧嘩騒ぎは珍しくもなく、度胸もあるということ、いまでは町のいっぱしの嫌われ者になった。そういう噂を聞かたびに、悲しい気持ちになるお柚だったが、どうしたわけかそんなふうになっても、竹造は霊岸島の家を訪ねてきた。荒んだ気配を身に纏まとってはいるが、自分を見る眼差しは、かつて一緒に暮らしたときと同じだった。

棚たなや雨漏あまもりを直したり、煤すす払いの手伝いをしてくれたりと、男手がほしいときには大いに役に立った。二人でいるときには、竹造がやくざ者だとは感じなかった。

「まあ、しょうがねえさ」

叔母として、堅気に暮らしてほしいという気持ちはある。だがそれを言葉にしようとすると、先手を打ったように竹造はそう口を開いた。

なるようにしかならないのが暮らしというものだから、まあこれも仕方がない。そういう気持ちもお柚にはある。達者にしていて、ときおり訪ねて来てくれるならば、よけいなことを言うのはよそうと考えるようになっていた。

「そうそう。貰もらい物のね、羊羹ようかんがあるんだよ。食べておいき」

取って置き、茶を淹れ、厚切りにした練羊羹を添えてやる。竹造は幼い頃から甘いものが好きだった。

そういう用意をしていると、なぜが気持ちが弾んでくる。

「どうしたんだい。あたしの顔に、何かついているのかい」

気がつくと、竹造はじつとこちらを見ていた。かなり真剣な眼差しだった。お柚が顔を向けたときに、慌てて目をそらせたのである。

「い、いや。なんでもねえさ」

竹造は、慌てた口ぶりでそう言った。最初に見たとき、顔色がよくないと感じた。いつもあるような、覇気がないのだ。

言いたいことがあるのだが、それを口に出しにくい。そんな気配である。

「どうしたんだよ。かまわずお言いよ」

この子のためならば、できることはなんでもする。そういう気持ちでお柚は言っている。

「うめえな。こいつは上物だ」

こちらの問いかけには応えず、竹造は指で羊羹を掴み、口に運んだ。嚙みながら、茶を啜り始める。気持ちをかき立てて、明るくしていると分かった。